

新出史料 御供船の艦飾りについて

— 広島市中心部における旧暦六月一七日の意義 —

中道 豪一

はじめに

本稿は広島市中心部における、旧暦六月一七日の意義について考察を加えたものである。そもそも旧暦六月一七日は世界遺産厳島神社（広島県廿日市市）で、管絃祭が斎行される日である。月照かりの下、管絃の音に彩られた御座船が瀬戸の海を進むさまは、現在も多くの人をひきつけ、敬神・崇敬の念を涵養している。その敬神・崇敬の念は広島県内にとどまらず、島根県や山口県・愛媛県などの近隣各県に波及しており、各地に鎮座する厳島神社では、旧暦六月一七日や近接する日に、今なお管絃祭や、それに関連する神事や祭礼が行われている。

日本三大船神事の一つに数えられる管絃祭だが、令和五（二〇二三）年時点における状況は、往時と比較し、衰退傾向にあると言わざるを得ない。そうした状況下、異常なレベルで、その存在が忘却されているのが広島県広島市である。原爆投下前、市内中、心部を賑わせた管絃祭関連の事例はほとんど忘れ去られ、

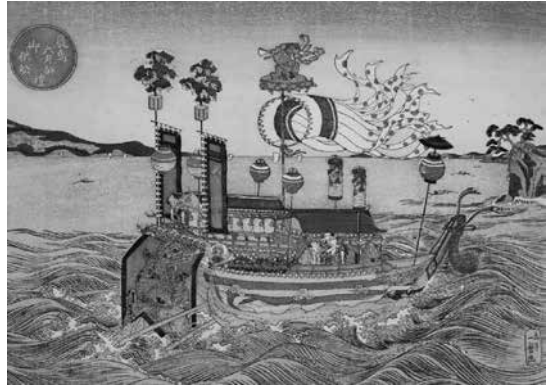
現平和記念公園に鎮座していた嚴島大明神をはじめ、祭日である旧暦六月十七日が、戦後は一九年に一回、原爆が投下された八月六日と重なる事実に至るまで、それらが広く伝えられることはなかった。これは行政・マスコミだけでなく歴史学・民俗学をはじめとする学術関係者においても例外ではない。

そこで本稿は、広島市中心部の旧暦六月十七日に関する意義を指摘するにあたり、令和五（二〇二三）年一月に発見された御供船の艦飾りを切り口に考察を展開した。新たに発見された艦飾りの画像紹介は勿論、考察を進める過程において、紙幅の許す限り関連する画像史料を多く扱ったこと、広島市中心部における学知の危機的状况に言及した点が特徴である。

一 御供船の艦飾り

令和五（二〇二三）年一月。広島市内某所で御供船の艦飾りが発見された。これは広島市中、心部における旧暦六月十七日の嚴島神社管絃祭にまつわる史料である。昭和二〇（一九四五）年八月六日の原子爆弾被害や戦後の混乱で、郷土の文化や記憶が断ち切られた広島市中心部において、実際に用いられた艦飾りの存在は、地域における祭礼の実像だけでなく、人々の祈りや願いを伝える貴重な存在といえる。

そもそも広島市中心部における御供船とは、正徳元（一七一）年、紙屋町の釣燈屋三代目市兵衛が、管絃祭の神船に兩具を献じるため「御供」した御用船に端を発する。しかし広島の人々によって愛されてきた御供船は、市兵衛より後の事例を指すのが一般的である。それが、神船の御供に憧れた城下の町々に



【画像1】「厳島六月祭礼御供船」（国立国会図書館蔵）※左拡大

よつて、管絃祭の奉祝を目的とし、神船の御供をするために設えられた御供船である。これは市兵衛のように、神社からの御用を受け御供したのではなく、御祭神を奉祝する人々による、自発的な御供であることを押さえておきたい。なお瀬戸内海沿岸地域では、島嶼部をはじめ、旧暦六月一七日あたりに、海へ流す小舟を「おともんぶね」と呼称する例もある。¹

この御供船の船尾を飾るのが艦飾りである。これは町々でデザインが異なっており、艦飾りを見ることで、その御供船がどの町のものかが分かるようになっていた。「厳島八景之図」を描いた岳亭一磨の「厳島六月祭礼御供船」（国立国会図書館蔵）【画像1】を見てみよう。上掲の錦絵には町名が記載されていないが、艦飾りには鷹が獲物を啜えたとされる絵柄がデザインされている。続いて岡田清『芸州厳島名所図会』（日本資料刊行会 昭和五〇）【画像2】を見ると、京橋町の幟を掲げた御供船を確認することができ、画像の引用範囲外には、猫屋町のものと思われる御供船と艦飾りを確認することができる。双方の史料とも、船に乗る人々の表情も描かれており、これから宮島の管絃祭に赴き、神船の御供をする人々の楽しそうな雰囲気醸し出されている。なお、この御供船の存在を意識



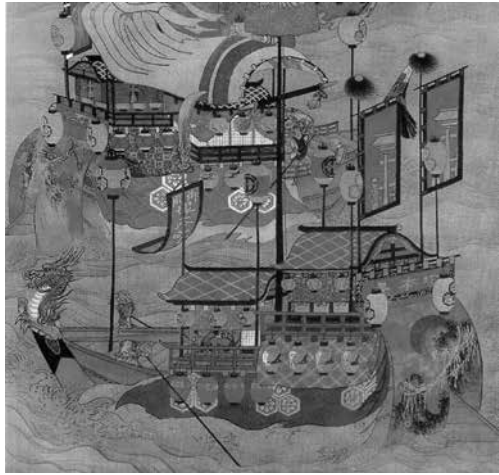
【画像2】「御供船川口を出るの図」（『芸州厳島名所図会』） ※右拡大

すると、様々な史料に、その姿を確認することができる。例えば前掲の岳亭一磨には、「厳島六月祭礼還御之図」という管絃祭を描いた錦絵作品があるが、その背景には三艘の御供船と思われる船が描かれている。また厳島神社に奉納された絵馬を描いた『厳島絵馬鑑』（天保三〔一八三二〕）には、神社西回廊に掲げられた、御供船の描かれた絵馬を確認することができる。なおその艦飾りには武者が描かれている。

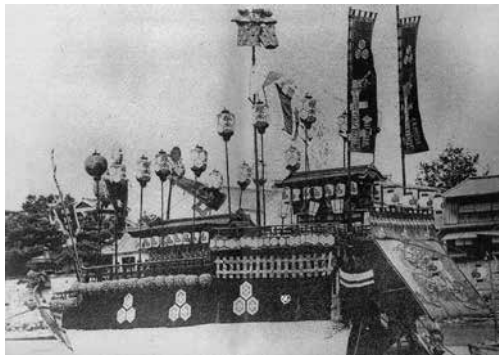
こうした艦飾りのうち、注意しておきたいのが、戦前、森川修蔵ら資産家たちの住んだ塚本町のものである。御供船は盛衰を繰り返しながら歴史を重ねていくが、昭和前期には、京橋川に数艘が浮かべられる状況だったという。本川ではそれよりも前に姿を消したと言われているが、塚本町は長い間、船を出し続けただけではなく、他町の御供船が宮島に渡らなくなつた後も渡島していた。その近世の姿を描いたものが山県二承「塚本町御供船之図」【画像3】である。艦飾りには、雄々しい松の姿や、二見ヶ浦を想起させる雄大な風景を確認することができる。この御供船の絵は、広島市公文書館編『図説広島市史』（広島市 平成元）の裏表紙に用いられており、広島市における御供船の位置づけや認識を伺うことができよう。そして、近代になっても姿を現していた塚本町の御供船を撮影したのが【画像4】である。艦飾りのデザインが「塚本町御供船之図」【画像3】と違つ

資料や証言が残っているが、特徴的なものとして、原民喜の証言と四国五郎の描いた絵【画像5】を挙げる。

原民喜は『中国新聞』（昭和二五年二月七日）で、御供船を左のように描写した。「昔、管絃祭の夜には京橋の明神の浜に、おとぼん船がやって来た。橋の上にはぞろぞろと人がひしめきあって、船の上で行なわれる十二神祇を見ている。かがり火が水に映り、衣装の金糸銀糸が火に照らされて、それを見ていると子供の私には、これはまるで夢幻のような世界であった」おとぼん船とは、御供船のことで、原爆後に見られなくなった京橋川の風景を懐古している。奇しくもこの京橋川の風景を描いているのが、四国五郎



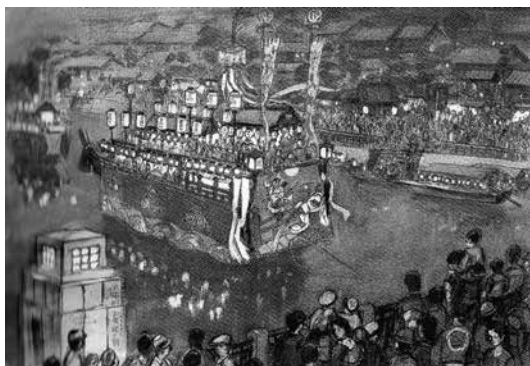
【画像3】山県二玄「塚本町御供船之図」（『図説広島市史』）



【画像4】塚本町の御供船（広島市中央図書館蔵）

たものになっていることが分かる。なお、これは『概観広島市史』（広島市役所 昭和三〇）に掲載された写真であり、御供船と広島市中心部における旧暦六月一七日の賑わいが、広島を概観するにあたり必要な存在として認識されていることが分かる。

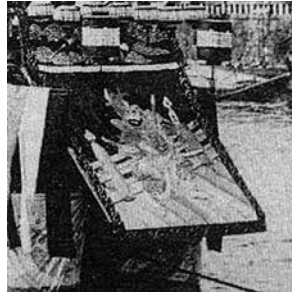
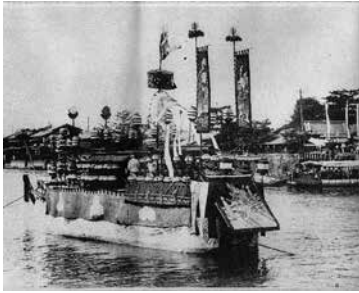
この他にも様々な史料・



【画像5】京橋川の御供船（『四国五郎平和美術館2』）

【画像5】²である。画像右下の人が集まっている場所が京橋で、御供船の右上が、現在も同じ場所に鎮座している橋本町の嚴島神社である。そして画面中央には、弁慶と牛若丸の描かれた艦飾りを確認することができる。

この京橋川の御供船のことを、薄田太郎が『がんす横丁』（たくみ出版 昭和四八）頁一六一に書き残している箇所を以下に挙げる。「明神浜、京橋川の中央には、京橋町、橋本町とそれぞれの町名を染め抜いた幟を立てて二そうの御供船が浮いている。船首には黒帯のさがりが、水にすれすれの美しい形をみせて、船の両側には水色の垂れ幕が、そのまま水の上に浮いて、船の中心部には破風づくりのやぐらが建てられ、その周囲には宮島さんの定紋や染め抜いたちようちんがつり下げられていた。船の四すみには、金糸銀糸でつづられた昇龍、降り龍の幟が立てられ、色とりどりの大きな吹き流しがあたりをはらっていた。とくに子どもたちの目をばちくりさせたのは、たたみ二畳敷もある船のとも飾りで、牛若丸と弁慶の五条橋が、金糸銀糸で縫いとられ、弁慶の七つ道具、牛若の狩衣などが輝くばかりの押絵で飾られていた。そしてこの押絵が、あかあかとかがり火に照らされた光景が忘れられない」この他、NHK広島放送局が、原爆で破壊される前の、広島を描いた絵画を集めた『わがなつかしの広島』（広島地域社会研究センター昭和五五）にも、御供船を描いた作品が収録されている。ここまで、いささか駆け足気味だが、御供船の艦



【画像6】京橋川の御供船（広島市中央図書館蔵）※右拡大

飾りを通し、広島市中心部における旧暦六月一七日の賑わいや、奉祝の姿の一端を指摘してきた。御供船の詳細な論考については、西村晃の論考や拙稿を参照頂きたい。³

二 発見された艦飾り

本項で、まず確認しておきたいのが、京橋川の嚴島神社沖に浮かぶ戦前期における御供船の写真（広島市中央図書館蔵）【画像6】である。艦飾りを拡大すると、橋の上に長刀を持った、弁慶と思わしき男性がデザインされていることがわかる。先ほど四国五郎が描いた艦飾りは牛若丸と弁慶のデザインだったが、こちらは弁慶単独である。これは筆者の聞き取り調査で、京橋川に浮かぶ御供船には、弁慶単独の艦飾りと、牛若丸と弁慶の艦飾りがあり、前者は後者よりも、大きかったことが判明している。

ちなみに、こうした御供船の艦飾りだが、衰退と共にその多くが所在不明となり、中には中島本町のように海外へ渡ったといわれるものも出てきた。そうした状況下、薄田太郎が、原爆を乗り越えた艦飾りを閲覧した記録が残っている。それが左の通りである。「京橋町のおともん船に飾られていたとも飾りが町内のある家に残っていると、東部の友人から知らされて、昭

不明となり、時は令和を迎える。そして、ある論文が契機となり事態が動いた。それが平成三一(二〇一九)年に発表した拙稿「旧広島市域における厳島管絃祭にまつわる祭礼行事について―近代における高ちようちん・火振り・御供船の様相と新祭礼行事の発生―」(『広島修大論集』五九―二 平成三一)である。



【画像7】発見された御供船の艦飾り(表面)

和二十九年夏、虫干しをされているところをたずねた。八畳の部屋いっぱいには広げられたこの『とも飾り』は、五条橋の弁慶の部分だけが筆者がこどものころに見かけたままの姿で、所蔵者の好意で裏や弁慶の持っている長刀の銘を見せてもらったが、銀メッキの長刀には宮島管絃祭のお供をした名残の塩サジが残っていた。その長刀の裏には、『明治三十四年七月京橋町由良久登作』と刻まれているのもおともん船のこよなき思い出である⁴。この記述は【画像6】の弁慶と、重なる点が多いわけだが、その後、この艦飾りは所在

拙稿に掲載した【画像6】を見て「この画像にある艦飾りは、自家で保存しているものと同じものではないか」との連絡が入った。そして筆者が確認したところ、間違いなく【画像6】と同じものであると共に、薄田が昭和二九（一九五四）年に、確認した艦飾りであることが判明した。その艦飾りの表面画像【画像7】と、裏面画像【画像8】を挙げる。

これまで絵図こそあれ、写真においては白黒でしか確認できない艦飾りだったが、実際、緋色の布地に立つ金色に輝く弁慶を見ると圧巻である。薄田がいうように、およそ八畳の部屋が一杯になるサイズで、原民喜が「夢幻のような世界」と回想した御供船を飾った現物である。厳島神社への祈りで満ちる旧暦六月一七日の夜、金色に輝く弁慶が、京橋川の川面を彩っていた姿を思い浮かべると、湧き上がる感動を禁じ得ない。

またこの艦飾りを本物と判じた一因として、裏面の由緒書が挙げられる。この由緒書が、昭和二九（一九五四）年に薄田が書き留めたものと、ほぼ一致した。薄田の記録は以下の通りである。「また、緋もうせんに盛り上ったとも飾りの裏には、十五センチ角の墨の文字でつぎのように書かれていた。厳島神社大祭ノ節、御供船飾ノ内、

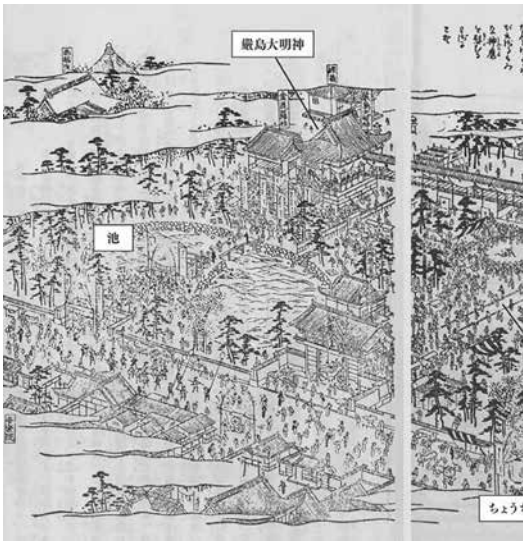


【画像8】発見された御供船の艦飾り（裏面）

艦幕切幕ナラビニ新調于時前飾之義、安政四年巳歳、大阪三井店ニテ新個所古而、今般町内ノ共親会図リ奇附金ヲ以ツテ新調候也、明治四十二年旧曆六月十五日保田八十吉識調之、尚後幕新調ハ本市大手町壹丁目、縫師岡野藤兵衛ニ托シ、此度ハ当地ニテ出来候也」⁵【画像8】を見ると安政四（一八五七）年に大阪の三井店で調整し、明治四二年旧曆六月一五日に新調したこと。これを保田八十吉が記したこと。大手町一丁目の縫師岡野藤兵衛が縫製したことが記されており、薄田の記述と一致していることが分かる。本史料は、この他にも様々な沿革があるが、詳細は他日に譲る。

三 忘れ去られた旧曆六月十七日

この艦飾りの発見は、広島市中心部における宗教文化、さらには城下町における町人文化に関する貴重なものと思われるが、ここで広島市中心部の歴史・文化・民俗に関する課題を指摘したい。それは国際平和文化都市、さらには百万都市といわれる広島市において、自分たちが暮らす地域の歴史・文化・民俗についての認識や意識が、壊滅的なものになりつつある事実である。



【画像9】『芸州厳島名所図会』の厳島大明神
(中道豪一『古地図と歩く広島』)



【画像10】過去と現在との対照図（中道豪一『古地図と歩く広島』）

この旧暦六月一七日に関する事例は、その状況を象徴的に示している。戦前まで、広島を代表する祈りの日であったにも関わらず、戦後になってから、全くといってよいほど顧みられていないのである。例えば現在の平和記念公園、それも平和大通り沿いの祈りの泉そばに厳島大明神（誓願寺境内）が鎮座し、広島の人々が祈りを捧げたことを誰が語り継いでいるだろうか。この事実を確認しようとすると、江戸時代に流通したガイドブック『芸州厳島名所図会』と、中国新聞社の作成した地図「平和記念公園（爆心地）街並み復元図」⁶を参照するのが捷径だが、ここでは拙著『古地図と歩く広島』（南々社 令和五）から、厳島大明神の様子【画像9】と、現在との対照図【画像10】を挙げる。

すると、現在、ゴールデンウィークのフラワーフェスティバルや、八月六日の平和記念式典で多くの人が集う空間が、広島人にとって祈りや喜びの場所であった事実は閑却され、今や無かったものとして扱われていることが分かる。歴史や文化の事実や記憶が、生活空間のフィールドで継承されていないのである。

更に深刻なのが、旧暦六月一七日という広島の人々にとって祈りと喜びに満ちた日が、八月六日という広島の人々にとって悲しみに満ちた日と、戦後、一九年に一度重なっている事実が、指摘・周知されなかったことである。令和五（二〇二三）年の旧暦六月

一七日は新暦八月三日だったが、昭和三八（一九六三）年、昭和五七（一九八二）年、平成一三（二〇〇二）年、そしてコロナウイルス感染症が世を騒がせた令和二（二〇二〇）年は、新暦八月六日が管絃祭の日だったのである。これは即ち、原爆投下による破壊がなければ、一九年に一度ではあるが、八月六日は祈りと喜びに満ちた日であったことを意味する。

現代広島が、この事実を承知したうえで、原爆のことに注力しているのならまだしも、「原爆の影響で古いものがなくなった」という思念や言葉に縛られ、旧暦六月一七日を始めとする歴史の事実を見失い、喜びや賑わいの記憶を受け継ぎ損ねているのが実態と考えざるを得ない。

筆者は令和に入り、これらの事実を世に問い始めたが、その過程で、それらの事実に関心、地域おこし活動を展開する人物に出会った。それが宮島の博多努氏である。博多氏はもみじ鰻頭を販売する博多屋の代表取締役社長で、一級建築士の資格を持つ人物だが、博多家は管絃祭の日、御座船を曳航する江波の人々に、休み宿を提供してきた家である。ゆえに旧暦六月一七日と八月六日が重なる事実にも気付いていただけでなく、郷土の文化を研究する中で、現在の平和記念公園に厳島大明神が鎮座していたことも、建築士の立場から認識していた。自身の生活空間に旧暦六月一七日の記憶や知識が生きていたわけである。

更に原爆が投下された昭和二〇（一九四五）年八月六日は、管絃祭で活躍した江波の人々が、地元で火祭りを行う日だったことも忘れてはならない。そして広島三大祭りの一つ、住吉神社におけるすみよしさんの隆盛が、もともと宮島の管絃祭を、広島市中心部で再現した広島管絃祭に由来すること、厳島神社の神を奉祝し白島九軒町の河原で振られた数百もの松明、町々に掲げられた高ちようちん、満ちてくる汐を汲む管絃汐、宮島に向かって柏手をうつ人々、本川や京橋川で行われる玉取祭。もちろんこれらは、全てが同時期に一齐に行われたわけではないが、前揚の御供船とともに、広島市中心部における旧暦六月一七

日の大切な記憶なのである。歴史の中でも、生活に密着した庶民の「平和」な歴史が、国際平和文化都市広島で顧みられていない事実は深刻であり、皮肉でもある。そして「先人の営みを無視」した先に築かれる「平和」や「町の賑わい」が、いかに歪なものになるか、よく考える必要がある。

四 おわりに

約四〇年前のある夏の日、激しく降る雨を見た大正生まれの祖父が「管絃のくそ流しじゃな」とつぶやいた。その意味を備後生まれ広島育ちの母が尋ねたところ、祖父の説明はこうだった。下水道が整備されていない時代、旧暦六月一七日、宮島の嚴島神社で行われる管絃祭の為に集まった人達の尿尿が問題になっていたが、祭が終わると、神様が大雨を降らせて綺麗にしてくれる。それで管絃祭の終わった頃に降る大雨を管絃のくそ流しという……というものだ。これは村岡浅夫編著『広島県民俗資料一』（小川晩成堂 昭和四二）に収録されている「宮島のくそ流し」の類語で、昭和後期の生まれである筆者の生活空間に残っていた旧暦六月一七日の記憶の一例である。

広島市中心部が原爆で破壊されたことは事実である。しかし原爆を乗り越え記憶のバトンを継ぐ手段は、豊富に存在していることを忘れてはならない。こうした「管絃のくそ流し」も記憶のバトンの一つで、宮島だけでなく、広島市中心部も管絃祭で賑わった事実を導く鍵になっているわけだが、果たして歴史や文化・民俗を扱う学術は、そうしたバトンをどう扱ってきたか。『図説広島市史』では表紙に用いられ、裏

表紙に御供船の画像が用いられるなど、旧暦六月一七日の評価がなされているが、都市と市民生活をテーマにした『広島市被爆七〇年史』（広島市 平成三〇）などでは、戦前の事例として扱われた形跡がない。平成・令和の世において、研究や学術の成果も受け継がれなくなっている傾向を確認できる。

もう少しで原爆が投下され八〇年という月日が流れる。世代が移り変わりゆく中、歴史や文化・民俗の学びに携わる者としては、旧暦といった生活感覚を語り継ぐことや、基礎史料や過去に著された先行研究を読みこなすといった地道な作業と、その成果を社会へ還元する作業が、これまで以上に重要になると考える。目先の情報に翻弄され、断片的な素材で広島を表現することは望ましいことではない。また、広島では他の都市とは違ったアプローチが不可欠であることも重要である。文献をはじめとする各種史料は勿論、口承の担い手が、史上かつてない規模で消されているからである。旧暦六月一七日の事例が、従来のアプローチから見出されなかった事実は、猛省すべき案件である。

広島県域における、厳島神社にまつわる信仰や習俗の重要性について議論の余地はあるまい。広島市中心部における八〇年という月日の中で、受け継ぎ損ねた記憶の断層があるならば、真正面から取り組み、学の意味を示すことが重要ではなからうか。この状況認識と姿勢こそ、国際平和文化都市広島市における歴史・文化・民俗の学の姿であり、神道学を専門とする筆者の役目と考える。今回見つけた艦飾りに輝く弁慶は、その方向性を示唆しているように感じてならない。

注

- 1 頁一〇〇村岡浅夫編著『広島県民俗資料一』（小川晩成堂 昭和四二）で、海に流す小舟として、沖美町のおかげん舟、倉橋島のおともぶねが紹介されている。なお「おかげん」の表記は、火を用いることに基づくもので、現在でも島根県邑南町の「火舟祭」や江田島町の「おかげんさんまつり」が有名である。また大崎龍神社（愛媛県西条市河原津）では「おかげん祭」の表記を「御管弦」と共に「御火絃」とも表記していたが、近年、そうした記憶が薄れ始めている。
- 2 四国五郎『四国五郎平和美術館二ひろしまの街』（四国五郎画集刊行委員会 平成一一）
- 3 西村晃「厳島神社管弦祭御供船をめぐって——広島県城下町祭礼断章」（『広島県立文書館紀要』九 平成一九）、中道豪一「小鷹狩元凱と薄田太郎への注目と再評価——失われた広島へのアプローチを通じた現代広島における郷土教育への一提言——」（『広島修大論集』五八―二 平成三〇）、中道豪一「旧広島市域における厳島管絃祭にまつわる祭礼行事について——近代における高ちようちん・火振り・御供船の様相と新祭礼行事の発生——」（『広島修大論集』五九―二 平成三一）
- 4 頁一六二 薄田太郎『がんす横丁』（たくみ出版 昭和四八）
- 5 頁一六二―一六三 前掲注四
- 6 中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター「https://www.hiroshinapacemedia.jp/?page_id=25623」（最終確認日 令和5年12月18日）